

批評と紹介

ウシュル・チョクウラシュ著

『单身房とメイハーネ——オスマン帝国イスタンブルにおける周縁と空間（1789-1839）——』

岩田 和馬

1. はじめに

本稿では、オスマン帝国の首都であるイスタンブルに存在していた、単身者向けの住居の総称である单身房（Bekâr Odaları）とメイハーネ（Meyhane, 「居酒屋」）を、18世紀後期～19世紀前半という時代背景を通して分析したウシュル・チョクウラシュの『单身房とメイハーネ——オスマン帝国イスタンブルにおける周縁と空間（1789-1839）——』の紹介と評価を行う。

イスタンブル社会はこれまで、都市経済や建築、文化などの様々な側面から研究が行われてきた。しかしながら、都市内の特定の空間と社会の関係に着目しながら行われた研究は非常に少ない⁽¹⁾。これは、江戸やパリ、ロンドンといった他の巨大都市とは違い、イスタンブルの正確な地図が作成されなかったことや、残存史料の制約によるものと考えられる。

また、これまでのオスマン都市社会研究には、同業組合についての分析は多数存在する一方で、本書で主要な分析対象となっている前近代イスタンブルにおける周縁的な人々や空間を扱う研究は、十分に行われてこなかった。本書における「周縁的」な人々とは、同業組合などに包摂されない季節労働者や物乞い、時には同業組合の徒弟なども含んだ都市下層と理解される人々を意味する。都市の周縁的な人々はまとまった形で史料に登場することが少なく、その構造を捉えることは困難を伴う。それゆえに都市社会の周縁は、これまでの社会史研究の中でも十分に検討されずブラックボックス化した領域と言える。

しかしながら、本書で取り扱われている18世紀の中盤から19世紀にかけては、都市における治安維持や公衆衛生の概念が浸透することで、物乞いなどの周縁的な人々が統制の対象として政府の関心の的になり、その姿を史料の中に見出すことが比較的容易になる。また詳細な都市の地図が作成されるようになったことから、それ以前の時代に比べて都市構造のより正確な把握が可能になる。周縁的な人々の構造的な特質や全体像を掴むこと

は、依然として困難であるが、本書はこうした周縁的な人々が暮らした空間を分析していくことでイスタンブルの都市下層社会の構造を明らかにすることを試みている。

2. 著者及び書誌情報

著者のウシュル・チョクウラシユは、イスタンブル工科大学建築学部を2005年に卒業したのち、同大学において建築デザインプログラムで修士学位を取得、2013年に博士課程を修了し、2018年現在はイスタンブル・ビルギ大学において教鞭をとっている。本書以外の研究業績には、单身房の分析や政府による都市社会への統制に関する論文のほか、建築学の観点から現代イスタンブルにおける空間利用を分析した研究がある⁽²⁾。

本書は、博士学位請求論文を加筆・修正したもので、全体の分量は296頁である。2016年8月にイスタンブル研究所出版 (İstanbul Araştırmaları Enstitüsü Yayınları) から「イスタンブル研究シリーズ」の第6巻として出版された。

3. 内容紹介

本書は单身房、ハン (Han, 「隊商宿」)、船小屋 (Kayıkhané), メイハーネなど周縁的空間とそれに対する統制の分析を通して、これらの空間を利用する「单身者」と呼ばれる周縁的な人々の分析を行う。本稿では本書の大きなテーマである(1)社会的周縁、(2)周縁的空間、(3)社会に対する統制、の3点に着目しながら本書の紹介と考察を行う。

第一章「序文」において、著者は、オスマン帝国時代の周縁的な人々と空間について考察する。单身房のような空間には、住居を所有しない街区社会から疎外された人々が居住して、独自の社会構造を形成していた。单身房やメイハーネ、ハمامといった空間は政府からは反乱や犯罪の温床と認識され、統制の対象とされた。統制の名目としては売春行為や賭博、同性愛といった当時の政府が「悪徳」と捉えていた行為が利用された。

第二章「前近代イスタンブルにおける変化」では、本書で扱う1789-1839年をイスタンブルの近代化の初期段階と位置づけ、この時代の社会的な変化を考察する。18世紀イスタンブルは、これまで以上の人口流入とそれに伴う人口稠密を経験した。著者は18世紀を、従来の社会とは異なった周縁的領域が拡大し、それらの領域が新たなアイデンティティを獲得し、政府の目にそれが可視化された時代であると位置づける。政府の把握していない社会領域の拡大は同時に犯罪への恐怖を生み、政府は身元の保証がない人々を出身地へ送り返すことでこれらの領域への空間的統制を強化して

いった。しかしながらこうした統制政策は十分に機能したとはいえず、その後も人口は増加の一途をたどった。

この時代に進んだ都市民とイエニチェリの混交も、都市社会の構造を変化させた。イエニチェリの称号は一種の社会的ステータスとなっていたことから、都市民はイエニチェリの身分を得るようになった。単身者たちもまたカフェに出入りすることでイエニチェリとの関係を構築し、イエニチェリに登録されることで身元保証を得ていた。このような混交を通して都市の治安を守るイエニチェリとそれを乱すとされた単身者が一体化し、都市の治安維持は機能不全を引き起こした。

著者は、社会階層や規範の領域が曖昧になったこの時代には犯罪の定義もまた曖昧になり、従来の刑罰システムが機能不全に陥ったと指摘する。移住者の増加は大量の失業者を発生させ、これらの人々が集住する空間は犯罪の温床として認識された。政府はその土地の出身でない人々によって犯罪が引き起こされていると認識しており、これらの人々が居住する都市の周縁領域への統制を強めた。この時代の統制を通して、オスマン帝国における都市管理の手法が発達し、前近代ヨーロッパと同じく公衆衛生や服装などの統制が強化されることとなった。

第三章「単身者たちと空間」は、単身者と空間の關係に着目する。著者は、単身者層を非熟練労働者、同業組合の徒弟、神学校の生徒などからなる社会階層であると定義する。「単身者層」という枠組みには日雇労働者から下級役人まで様々な人々が含まれており、一つの社会集団として一括することはできない。しかしながら、これらの人々は土地を所有せず、単身者であるために通常の街区社会から排除された。彼らは宗教や民族的出自の別なく単身房やハンに集住するという共通点を持ち、外部からは問題を起こす集団として認識された。単身房はしばしば取り壊しを命じられ、仕事と保証人を持たない単身者は出身地へと送り返された。しかしながら、単身者たちは同郷人が経営するハンに入り込み保証を得ることで刈り込みから逃れることができた。

単身房やハンは、エミノニューウスキュダルの船着場や商業地域、国営造船所(Tersâne-i Amire)の周辺に多く建設され、単身者たちが集住していた。単身者の大きな割合を占める荷役人夫や船子といった人々は、都市労働人口の中で最大の集団を形成しており、地縁的な繋がりを通して集団化し、独自の内規を有していた。彼らの居住する単身房は同業組合の組合長に管理されており、居所を通して身元が居所の所有者(=組合長)によって把握されていた。また、一部の単身者たちは、カフェの二階に形成された単身房に居住していた。ハンなどの単身者用の居所は、主にワクフから

持ち主が土地を借り受け、各部屋を個別の単身者に対して又貸しするという形で経営されていた。

著者は「単身者層」の内部を明らかにする上で、彼らの職場と居所の違いに着目する。デウスルメで徴用されたキリスト教徒弟といった最下級の軍人たちの生活実態は、他の単身者とあまり変わらないものであったと著者は述べる。組合の労働に従事する単身者たちは組合毎に居所や居住の形態は異なったものの、多くの場合、街区社会からは異質な存在として認識されていた。単身者たちは街区周縁に建設された単身房やハンに居住していたが、その人数が増えるにつれて街区内部の建物が単身者たちに貸し出されるようになった。このことは、単身者たちが街区空間の内部に入り込む原因となった。しかしながら、単身者たちは空間的には街区内部に入り込んでいても、依然として社会的に排除されていたことを著者は強調する。

イスタンブルの城壁外部の各門周辺にも単身者たちは増加しており、19世紀初期にはこれらの地域も含めた単身房の調査が行われた。調査によれば、単身房の多くはマフムトバシャ、タフタカレ、エミノニュなどの商業の盛んな地区に集中していた。こうした商業地区には、店舗に居住する単身者も多く、製パン所や粉挽き所で働く単身者がそれにあたる。このことから、同業組合の成員の居所と職場は厳密に分けられていたとする従来の捉え方を再考する必要があると著者は述べる。また、港の周辺や海岸部にも多数の単身者が居住していた。特に人口が増大し単身者の居住地も拡大した18世紀以降の都市社会を把握していく上で、こうした周縁の空間のさらなる分析は大きな重要性を持つ。

第四章「メイハーネ」では、単身房と並んで統制の対象とされてきたメイハーネの社会的な分析を行う。メイハーネはビザンツ時代から続く文化であったものの、16世紀から一貫して治安を理由とする統制の対象となり、タンジマート改革以降も、国民の健康という観点から統制が続けられた。

公認されて営業するメイハーネはゲディキ (Gedik、「営業許可証」) を所有し、メイハーネ親方衆によって特定の地区で営業されていた。これらの営業者たちは非ムスリムによって構成されており、金角湾沿岸のメイハーネは全てユダヤ人によって経営されていた。また、メイハーネは対象とする客層により名称や形態が変化し、公認のものと非公認のものが存在した。こうしたメイハーネが集中する地区は文化の中心として存続していたものの、メイハーネを中心とした社会関係は不明な部分が多いと著者は述べる。

第五章「都市の周縁と空間 (18世紀末期-19世紀初頭)」では、都市の周縁的な人々と空間の関係を分析する。本書で扱う時期は、前近代的刑罰シ

システムが近代的な刑罰システムへと転換していった時代であると著者は定義している。前近代のオスマン帝国において犯罪は、特定の土地が発生源となっていたと考えられており、刑罰システムもその犯罪の属地性に着目していた。そのために政府の統制は犯罪そのものではなく空間に対して行われていた。西洋的な刑罰システムがオスマン帝国に紹介されて以降も旧来の犯罪に対する価値観は保持され、二つの刑罰思想が対立する間に統制が機能不全に陥り、都市社会内部に様々な階層が形成されていった。これを受けて政府は、統制の対象を空間から集団へ転換した。このことから著者は、19世紀は都市の治安と統制政策の転換期であると結論づける。この頃から政府は具体的な空間よりも「アルバニア人」や「单身者」といった特定の集団を問題の源泉として捉えるようになっていったと著者は主張する。

また著者は、メイハーネがガラタ地区にのみ存在していたという従来の言説を否定している。ガラタ以外の様々な地区にもメイハーネは存在しており、政府による隔離政策は従来考えられていたほど厳しくは守られていなかった。こうしたメイハーネの存在する地域は商業的な中心地であり、单身者の多く存在する地域であった。こうした单身者たちにとってメイハーネとは単に飲酒を行う場所ではなく、居住街区にとらわれない社会関係を構築する場であった。このため、メイハーネの社会的機能はカフェの持つ社会機能に近似的であった。そこは同時に政府から把握されない周縁的な社会関係が形成される空間であり、必然的に政府からは治安悪化の根源として捉えられることになった。

4. 本書への評価と疑問

本書における最も重要な議論の一つは、18世紀中盤から19世紀を「従来の社会とは別の周縁的領域が拡大し、それらの領域が新たなアイデンティティを獲得し、政府の目にそれが可視化された時代」として捉えるという第二章における議論である。大規模な人口流入という社会的な事象を契機として、社会内部におけるこれまでの労働のあり方や構造がより複雑に分化し、権力によって把握されない「周縁的」な領域が拡大した⁽³⁾。こうした「周縁的」領域は、本書で扱われた单身者や物乞いやこうした人々によって構成される非公認の社会集団であり、このような集団は政府からは統制の対象として捉えられていた⁽⁴⁾。政治レベルにとどまらない「周縁的な」民衆世界をも含むイスタンブルの社会構造を捉えていく上で、周縁的な空間に着目する著者の方法は非常に重要な視角を提供している。また、ここで指摘されている「周縁的領域」の社会構造を分析することは、前近

代から近代への社会構造の変化を捉える上で大きな重要性を持つと言える。

上記の議論をさらに成熟させる、という観点から本書が研究史において持つ意義と、本書中で扱われる幾つかの事例とその解釈に対して評者が抱いた疑問を述べる。

まずは、本書の持つイスタンブル都市社会史研究における二つの意義について手短にまとめる。

一点目は、空間と社会の関係を分析した点である。イスタンブル都市社会史研究において、社会集団と空間の関係を分析した研究や、特定の空間を媒介とする諸社会集団の関係を扱う研究はほとんど行われていない。近年では市場や港といった空間を媒介とした社会関係を分析する重要性が認識され⁽⁵⁾、研究が行われつつあるが未だに不十分であると言わざるを得ない。单身房やメイハーネという空間に着目し、そこを利用する单身者の分析を行った本書は、都市空間と社会の関係に着目する先駆的な研究の一つであると評価できるだろう。

二点目は、周縁の社会の研究を行った点である。これまでのイスタンブルを扱う社会史研究は、上流階級の文化や都市におけるエリートが中心的な分析対象であり、同業組合の研究でさえ未だ十分に行われていない。ましてや本書で扱われたイスタンブルの都市下層はこれまでほとんど無視されてきた領域であった。残存史料の制約から都市下層を研究することは非常に困難であるとこれまで考えられてきたが、本書は、周縁的な空間に着目して都市下層を研究することでその研究の可能性を提示した。このことは、イスタンブル都市社会史研究にさらなる展望を示したと評価できる。

一方、疑問点としては、本書は周縁的な空間と集団の関係と統制の分析を行っているが、社会集団内外において形成される権力関係や交通等の社会関係の分析が欠けていることが挙げられる。確かに著者が指摘する通り、特定の都市空間において形成される個人的な関係を史料から分析することは難しい。しかしながら、例えば社会集団内外における集団的な関係から、都市下層の実態をある程度分析することは可能であるように思われる。本書でも指摘されていた通り、組合長の経営するハンには組合外部の单身者も宿泊していた。住居という空間における持ち主と居住者の間の権力関係を、同業組合の末端業務の斡旋といった具体的な事例から分析していくことで、都市下層のあり方を他の集団との関わりの中から示せると考えられるが、本書ではこうした社会関係への着眼が欠けているような印象を受ける。

また、前近代オスマン帝国において統制は空間に対して行われたという議論に対しても疑問を覚えた。著者の述べる通り、周縁的空間に対する統

制は度々行われており、18世紀の法廷台帳などに記録されている单身房やハンの取り壊しを命じた勅令には、これらが悪徳や犯罪の温床となることが明記されている。しかしながら、单身房とそこに宿泊する人物への統制を通じた、集団に対する統制とみられる事例も存在している⁽⁶⁾。このような事例は、19世紀になってから集団に対する統制へ転換したとする著者の主張とは矛盾する。また、同業組合や宗教共同体などの社会集団が集団の自治性に依拠しながら政府に管理されていたことを考えても、著者の主張する前近代的な空間に対する統制と近代的な集団への統制という捉え方はさらなる検討を必要とするだろう。

この二つの疑問はいずれも社会集団間の社会関係への分析の欠如と関連する。特定の空間を結節点とする社会関係を検証することで、より具体的に諸社会階層のあり方や都市社会の全体構造を明らかにできるだろう。しかし、現在のオスマン社会史研究において、具体的な同業組合や宗教共同体を題材とした研究は行われているものの、これらの集団が具体的な空間に基づいてどのような関係を形成していたかは多くの場合見過ごされてしまっているように思われる。空間そのものの性格とそれに規定される社会関係を明らかにすることは、諸社会集団を都市社会という枠組みの中で、捉え直すことを可能にする。また、統制の議論においても、統制の現場で実際に誰がどのようにして誰を統制していたのかが多くの場合不明瞭のままである。同業組合や街区といった共同体であれば、その自治性に依拠しながら政府による統制が行われていたが、本書でも述べられている通り、多くの单身者はこうした紐帯の外部に置かれた存在であった。おそらく宿泊するハンなどの経営者を通して統制が行われていたと考えられるが、この点を明らかにするためにも都市下層と他の集団との間の社会関係の分析が必須のものとなる。

史料的な制約のためにこのような社会関係の分析は容易ではないが、断片的な史料を利用しながらでも社会関係に着目した分析を行うことは、イスタンブル都市社会史研究において本書の意義をさらに高めるものになるだろう。そのため、イスタンブルにおける空間と社会の関係に着目する研究の可能性とそれに続く発展性を示しているという点において、本書はオスマン都市社会史研究の先駆的研究であり、これからの研究へ対して非常に重要な提起をする労作であることは疑いようがない。

註

- (1) 代表的なものとしては、Cem Behar, *A Neighborhood in Ottoman Istanbul: Fruits Vendors and Civil Servants in Kasap Ilyas Mahalle*, Albany: State

University of New York Press, 2003. が挙げられる。

- (2) Çokuğraş Işıl, “Osmanlı İstanbul’unda Bekar Odaları” *Mimar:ist*, 47, 2013, pp.29–35; “Urban Regulations in 18th Century Istanbul: Natural Disasters and Public Dispute” *ITU A/Z* 13-1, 2016, pp.183–193; “Regulation of Urban Space in the Ottoman State: The Case of Istanbul (1820–1900)” *Megaron* 11-1, 2016, pp.1–14.
- (3) Donald Quataert, “Clothing Laws, State, And Society In The Ottoman Empire, 1720–1829”, *International Journal of Middle East Studies* 29-3, 1997, pp.403–425.
- (4) Betül Başaran, *Selim III, Social Control and Policing in Istanbul at the End of the Eighteenth Century: Between Crisis and Order*, Leiden: Brill, 2014, p.1.
- (5) Suraiya Faroqhi, *Artisans of Empire: Crafts and Craftspeople under the Ottomans*, New York: I.B.Tauris, 2009.
- (6) Akif Aydın, eds., *İstanbul Kadı Sicilleri: İstanbul Mahkemesi 24 Numaralı Sicil (H. 1138–1151/ M. 1726–1738)*, İstanbul: İSAM, 2010, pp.368–376.

Işıl Çokuğraş, *Bekâr Odaları ve Meyhaneler Osmanlı İstanbulu’nda Marjinalite ve Mekân (1789–1839)*, İstanbul Araştırmaları Enstitüsü Yayınları, 2016, 296pp.

(東京外国語大学大学院 総合国際学研究所 博士後期課程)